20064

PCI 施行時ロータブレータが破損した一例

【背景】近年、デバイスの発展により PCI の適応範囲が拡大しつつある。高度石灰化病変に代表される硬い病変に対し、血管内腔確保に有効なデバイスにロータブレータがある。当院でも約 2 件/3months 程度ロータブレータを用いた手技を行っている。2015/6/2 当院にて#2 の高度石灰化病変に対する待機的 PCI にて、ロータブレータ施行時 Shaft と burr が離れるという破損を経験したため報告する。【方法】2015/6/2 に生じたロータブレータ破損症例に対し振り返り、検討をおこなう。【結果】当症例において#2 の走行が円を描くような蛇行があるとともに、広い範囲で高度な石灰化が認められた。この病変に対しロータブレータを施行したところ、操作性と回転数などに異常は見られなかったが、Shaft とburr が離脱した。Shaft、ワイヤーをゆっくり引くことでガイドカテーテル内に burr を収め、体外に回収することできた。その後、再度ワイヤリングを行い、balloon、STENT にて合併症なく手技を終了している。【結論】今回のようなロータブレータの破損はそれほど頻度ではないが、起こり得るリスクである。それに加えロータブレータを使用する際は切除した組織による末梢塞栓やスパズム、熱などによる no flow、slow flow や冠動脈穿孔のなどのリスクがある。改めて診療放射線技師として透視・撮影画像を観察すること、リスクを予測することの重要性を感じた経験だった。